

平成23年度 南関東大会観戦記

東京都選手団の戦い

強化委員長 小林 隆雄

今年の南関東大会は、6月17日から20日まで千葉市スポーツ公園陸上競技場で行われた。5月の東京都大会で出場権を獲得した東京都選手団の健闘ぶりを少しではありますが皆様にご報告致します。

大会初日の男子砲丸投で東京高校の鈴木 愛勇が東京都高校新記録を樹立したほか、男子400mリレーで東京高校、男子円盤投でも佐藤 光一（都松が谷）・大山 優汰（東京高校）が大会新記録をマークした。

その結果、男子が延べ41種目と3チーム、女子は延べ17種目と3チームが北上インターハイへの出場を決めた。特に男子は7種目に優勝し、インターハイ出場数が7つも増えるという活躍であった。

＜前日（6月16日木曜日）＞

曇り空の千葉には、朝6時に到着。既に各テント場所の入り口には列がなされており地元千葉県の先生方が整理をされていました。時間を追うごとに人が増え、開門時間の9時から整然とテントが設置されていきました。10時には本競技場には大勢の選手たちが調整練習を始めており、関東各校のジャージを目にし「いよいよ」関東大会のムードが高まってきました。

監督会議・競技力向上委員会・記録情報委員会を経て前日の予定完了。明日からの熱戦に緊張感が高まりました。

＜大会初日（6月17日金曜日）＞

朝からの雨で開会式は室内で。10時からいよいよ競技開始です。

男子砲丸投

今大会最初の決勝種目は、大会前の全国ランキング上位3名が揃い大激戦が予想された。その中、東京高校の鈴木 愛勇が2投目に16m64の東京都高校新記録をマークして2位につけた。また、都立松が谷高校の佐藤光一が自身初となる15m台をマークして優位に立った。3投目を終え大山 優汰・幸田 和記を加えた4名がトップ8に残った。5投目に大山が15m47、佐藤が15m5

1に記録を伸ばし、最終の6投目に幸田が60cm以上記録を伸ばし大逆転で6位に上がった。そして、鈴木は16m65に記録を伸ばし東京都で4名がインターハイ出場を決め、東京都選手団に勇気を与える幸先の良いスタートを切った。

男子400m

トラック競技でも東京都選手の勢いが際立った。予選3組全てで東京勢が1着を取り3名が決勝へ進んだ。

特に予選1組でトップ通過した小林 将一（保善）はスムーズな加速からゴールまでスピードに乗り、自身初の48秒台（48秒52）の走りを見せた。決勝では、800mが専門の三武 潤（城西大）が終盤素晴らしい伸びを見せ誰よりも早くゴールを駆け抜けた。400mHの松本 健志（中大附）も終盤粘り6着に入った。予選で素晴らしい走りを見せた小林はレース中に脚に痙攣を起こし本来のレースができなかったのは残念であった。

女子400m

女子最初のトラック競技であるこの種目では、東京都大会2位の村本 明日香（戸板女）が東京都でただ一人決勝へ駒を進めた。決勝ではゴールまで混戦であった中、最後まで諦めずに走り抜いた結果6位に滑り込んでインターハイ行きを決めた。ただ、都勢出場6名のうち都大会より記録を伸ばしたのは村本1名だけであって、都大会での走りができていればもう少し良い結果であったかと思うと残念であった。

男子1500m

激戦が予想されたこの種目、予選から厳しいレースが繰り広げられ都勢は4名が決勝へ進出した。決勝では昨年1年生ながら優勝した打越 雄允（久我山）が素晴らしいスパートを見せ抜け出し3分53秒92で2連覇を達成した。2位には菊池 聡之（岩倉）が3分54秒14と自己記録を大きく更新する健闘をみせた。菊池はこの冬故障に苦しみ、シーズンに入ってから調子が上がらずにいたがここにきて本調子にするあたりは評価に値する。しかし、3分55秒台が6位入賞ラインとはレベルが高い印象が強かった。

女子やり投

東京都大会では40mを超えていた3名に入賞のチャンスが高いと予想されていたが、結果としてはそれが的中したかたちとなった。都勢では、和田 茜（東海大菅生）と記田 良恵（都武蔵野北）がトップ8に入り6位を争った。40m69

を記録した和田は4位としたが、38m71と40mに届かなかった記田は8位となった。また、東京都大会を42m81で優勝していた小山 夏帆(拓大一)は大会前日に脚を故障し涙をのんだ。

男子走幅跳

やや強めの追い風の中行われ、レベルが上がる事が予想されながら競技は開始された。風に惑わされることなく助走を合わせることができた選手はしっかりと記録を残していた。その中で、東京都大会優勝の佐藤 耕太(都片倉)は追風3.0mのなか7m29をマークし優位な順位をキープした。東京高校1年生の内川 佳祐はこれも参考記録ながら7m10を跳び都勢は2名がトップ8に駒を進めた。結局両名ともこの記録にとどまり佐藤は3位とした。内川は6位と同じ7m10としたがセカンド記録で及ばず7位とした。同じ1年生の前田 淳(早稲田実)も6m91の自己ベストを跳ぶ健闘を見せたが順位は11位にとどまった。

女子5000m競歩

今年から5000mに距離が延び実力の違いがはっきりと記録にあらわれることとなった。東京都では優勝した味波 舞(八王子)が29分25秒42であったが、関東大会では上位3位までは23分台とその差は歴然であった。インターハイ出場は4位までであるが、その4位は25分25秒14であった。都勢では味波がレース途中失格となったが、本山 綾子(錦城)・斉藤 あきほ(都上水)・若杉 遥夏(東京)は都大会から1分以上記録を短縮する健闘を見せた。しかし、全国への道のりは厳しい状況であった。

女子走高跳

この種目、久しぶりに東京都から1年生チャンピオンが生まれた。東京都大会優勝の伊藤 明子(田園調布学園)が関東大会でも唯一人1m67を跳び栄冠を得た。伊藤は終始安定した跳躍を続け、まさに「危なげなく」試合を運んだ。優勝を決めた後の1m70にも惜しい跳躍があり、近いうちに大台を記録することを予感させた。都大会3位の古家 桃(都五商)は1m61を跳び、同記録ながら試技数の差で6位とシインターハイを決めた。

<大会2日目(6月18日土曜日)>

雨も明け方には上がり、まずまずのコンディションであった。

男子100m

全国ランキングNO1の千葉縣市立船橋高校の梨本君のスタートからの加速は素晴らしく、東京都を代表するスプリンター、ケンブリッジ飛鳥(東京)の後半の追い上げも届かないレース展開であった。しかし、決勝に残ったケンブリッジ10秒66、女部田 祐(東京)10秒75と自己ベストを叩き出し3位・5位とダブル入賞を果たしたのは見事であった。

男子5000m

昨年の千葉国体少年B3000mで優勝している久我山高校の打越 雄允がラストの凌ぎ合いを制して14分32秒29の優勝タイムでゴールを駆け抜けた。初日の1500mでも優勝しており千葉県は打越選手にとって非常にゲンのいい会場ともなった。また、2位武田 凜太郎(早稲田実)3位我那覇 和真(東京実業)と東京都選手が上位を独占した。終盤まで集団で、まさに「纏れた」展開であったが3名のラストのスピードが優った。この種目で、このような快挙は今までに記憶がない。「お見事」でした。

男子400mH

東京都大会で大会新記録をマークしていた松本建志(中大附)が好調であった。前日の400mでも入賞していたが「疲労」の心配もなく危なげなく予選を走った。決勝でも自身のレース展開を貫き、得意のラストでの伸びは今までで最高であったと感じた。その結果、52秒18の自己新記録で2位とした。東京都記録まであと僅かに迫る好記録でのレースはまさに「快心」であった。ただ、他の東京勢にもチャンスがあっただけに来年に期待したい。

男子棒高跳

以前は、4m60が6位入賞ラインではあったものの、ここ2年ほどは4m40前後にその基準は下がってきている。今年も入賞ラインは4m40と予想通りの展開となった。東京都選手では4m60の自己ベストを持つ船本 稜矢(日本ウェルネス)が自己記録と並ぶ4m60を安定した跳躍でクリアし2位とした。4m70も惜しい跳躍であったが全国大会に期待しよう。都勢出場者は4名が1・2年生なだけに今後の強化次第では複数が全国に出場できるよう練習会等に取り組んでほしい。

男子ハンマー投

東京都大会優勝の若月 優士(都北多摩)が1

投目に56m34をマークし、前半をトップで折り返した。5投目以降、神奈川県勢2名が記録を伸ばし順位を上げ若月は3位としたが先制の1投が功を奏した結果となった。だが、56m台を確実に投げられれば全国大会でも決勝に進出可能なだけにこれからの調整に期待したい。長田 芳臣(保善)も49m台をコンスタントに投げたが9位とし入賞を逃した。

男子八種競技

二日間にわたって行われたこの種目。4845点で都大会優勝の中嶋 健人(立教池袋)が各種目に健闘し180点ほど都大会から点数を伸ばし第5位とした。特に7種目目の得意のやり投げでは58m71の自己ベストをマークし一気に上位に順位を上げた。この種目3位までが全国に出場できる。しかし、3位以下でも全国大会に5名が出場可能であったがそれには及ばなかった。都大会2位の栗原 彰理(都東大和)にも期待がかかったが脚を故障し本来の競技には至らなかった。来年に期待しよう。

女子100m

神奈川県相洋高校勢が1・2位を占めたこの種目、東京都勢も健闘した。3位藤森 安奈(東京)、4位峰 悠花(東京)、4位山崎 真理(桐朋女)と3名がインターハイへ駒を進めた。特に峰・山崎は混戦の準決勝を自己ベストで好調に走り抜き、その勢いのまま決勝に臨めた結果が好順位を生み出した。共に12秒2台をマークする会心のレースであった。

女子1500m

前日に予選を走り、都勢からは鈴木 翔子(白梅)、茂木 美優・久保 七星(順天)、谷萩 史歩(八王子)の4名が決勝に進んだ。決勝では鈴木が終始先頭集団を形成し自分のレースに徹した。やはり、都大会よりペースが速く、それに対応出来たのも鈴木一人であった。終盤鈴木のパースが鈍り、ゴールでは5位で4分24秒50とした。また、1年生の谷萩も最後まで諦めず4分30秒34で8位とし来年に望みを持たせた。

女子400mH

予選1組を都勢でただ一人、1分02秒台で1着とした岩本 香奈(東京)が決勝へ進んだ。その決勝もスタートから積極的に攻め、終始正確なインターバルからリードを保ち最終コーナーを出た。終盤ややスピードが鈍り5着としたが、2つのレースを1分2秒台にまとめたのは収穫であった。

た。

女子円盤投

都大会でレベルが低かったこの種目は、関東レベルではやはり苦戦を強いられた。その中で、東京都大会優勝の武末 優(東京)が35m72の自己ベストをマークしたが7位とした。だが、来年へ期待を繋げた。しかし、この種目神奈川県勢が6位までを独占する猛威をみせた。年間を通じて強化練習を継続しての成果だそうだ。見習う点があると痛感した。

男子400mリレー

前日の予選で40秒80をマークし決勝に進んだ東京高校は、決勝でも東京都大会・支部予選と不動のオーダー(加藤・ケンブリッジ・猶木・女部田)で臨み、40秒70の大会新記録を樹立し優勝した。バトンパスはまだ「パーフェクト」ではないながら、今年これまで、コンスタントに40秒台を記録し、個人種目でも自己記録を更新してきている東京高校メンバーにはインターハイでの優勝を是非とも期待したい。その一方、他の東京都チームにもインターハイ出場のチャンスがあっただけに残念でもあった。

女子400mリレー

東京高校と白梅学園が予選を通過し決勝に駒を進めた。決勝では、東京高校は前半やや伸び切れなかったものの、3走峰からアンカー藤森への加速力で終盤抜け出し相洋に続いて2着(46秒83)でゴールした。優勝した相洋高校は46秒36の大会新記録であり全国ランキングもトップとした。白梅学園も都大会より記録を短縮したもののあと一歩及ばず7位とした。

〈大会3日目(6月19日曜日)〉

晴れ間の覗くまずまずのコンディションのなか後半戦が始まった。

男子200m

予選から全国レベルの展開となり、市立船橋・東京・保善からそれぞれ2人ずつ決勝へ進んだ。やや向い風が気になる中決勝がスタートした。やはり、スタートに優れている市立船橋の梨本君が一気に他を10m以上引き離し、それをケンブリッジが追いこむ予想通りのレースとなった。結局ゴールまで追いつくことは出来なかったが、梨本21秒30、ケンブリッジ21秒40とした。他の都勢も小林 将一(保善)4位、猶木 雅文(東京)5位、金戸 正太郎(保善)6位と入賞を果

たし東京都から4名もインターハイへ出場できた。

男子800m

決勝へ進むには厳しい予選3組2着+2。東京都勢で、その予選を1分54秒台で潜り抜けたのは三武 潤（城西大）、白石 浩之（立教池袋）、出口 翔（開成）の3名であった。決勝ではやはり実力者の三武が集団を引っ張る形となりラスト200からのスピード勝負となっていた。三武は初日の400mでも優勝しており、スピードには一枚上手で、そのまま1分54秒31でゴールまで先頭で駆け抜けた。白石も終盤までしっかり走り切り4位に、出口も最後まであきらめずに6位とした。予選・決勝とよく集中していた3名であった。

男子5000mW

気温・湿度ともが上がり始めた時刻にスタートしたこの種目。東京都大会で21分台の好記録をマークしていた星谷 建・洪 肇佑の東京実業の両名に期待がかかっていた。都大会と同じようなペースでレースは進んでいったが暑さから徐々にペースが落ちて行った。その中で、洪が終盤まで何とか持ちこたえ22分21秒71のタイムながら4着でゴールしインターハイ行きを決めた。都大会優勝の星谷は大会直前に体調を崩し本来の力を発揮できずに無念の涙を流した。これまでの努力を次の目標で結実させてほしい。

男子走高跳

今年の南関東地区では2mを大きく超える記録を保持する選手がなく「混戦」が予想された。東京都から出場した6選手全てにチャンスがあった。都勢は6名がみな1m90をクリアし、続く1m95も4名が越え、期待がもたれた。結局、この1m95で運命が分かれた。1m98をクリアした小林 亮（八王子）は4位、1m95の試技差で阿部 一毅（都日比谷）が6位に滑り込み、同じ1m95の先崎 航（都つばさ）、松鶴 竜次郎（都武蔵野北）は涙をのんだ。関東のレベルになると「試技の差」が大きく順位に影響することを改めて実感した。

男子やり投

「槍は水もの」といわれ、ランキング通りの比較的安定した結果が出る投擲競技の中で、やり投げだけは「やってみなければわからない」種目と言えよう。その中で、前日の八種競技でのやり投げで好調だった中嶋 健人（立教池袋）と、前週の学年別で59mを投げこれも好調を維持してい

た岩佐 太一朗（東京）が、ともに1投目に集中した投擲を見せ優位に立った。その後、60m台の記録を持つ実力者が記録を伸ばしたが、中嶋4位、岩佐6位とこの日好調だった二人にインターハイ行きが決まった。

女子200m

25秒30までで予選を走った選手が決勝へと進んだ。東京都からは藤森 安奈（東京）が100分の1秒差で2位をわずかにかわして24秒82で優勝した。杉山 奈詠（八王子）も7位と100分の1秒差の25秒39で6位として両名が全国大会出場を決めた。ただ、昨年関東新人大会2位だった山本 芽衣（日工大駒場）が故障から落選したのは残念であった。また、神奈川県相洋高校は3名が入賞しスプリント種目の強さが際立った。

女子800m

昨年千葉国体で優勝している鈴木 翔子（白梅学園）は予選から独走で2分12秒15とし、同じ白梅のト部 蘭も予選2分13秒58の1着として予選を危なげなく通過した。決勝でも鈴木がスタートから独走しレースを優位に進めていった。しかし、終盤神奈川県2選手にかわされ3着の2分10秒13とした。ト部も最後までよく粘り抜き2分11秒88で6着として1年生としてのインターハイ行きを決めた。

女子走幅跳

最後の6回目まで目まぐるしく順位が変わる展開であった。その中、東京都勢は1年生の利藤 野乃花（白梅学園）が1回目に5m77を跳びトップで前半を折り返した。この他、國分 春菜（東京）・加藤 咲希（明中八王子）が4回目以降に臨み、加藤が5m59で5位、國分が5m58で6位とした。この種目で優勝した藤沼選手（神奈川県希望が丘）は1年生ながら2位となった七種競技の合間にこの種目に出場し優勝を遂げた。

＜大会4日目（6月20日月曜日）＞

最終日も雨は降らなかったものの、ホームストレートは強い向い風でハードル陣は苦劳しました。

男子110mH

昨年は東京都から5名がインターハイに出場したこの種目。今年も都勢の勢いは止まらない様子。厳しい東京都大会を勝ち抜いた6名の選手たちは、強い向い風の中予選を迎えたが、無事全員が準決勝に進出した。準決勝の1組目では向い風2.3

mの中、高畠 匠（東京）が14秒47の好記録をマーク。2組目では向い風2.1mの中、城倉 壮志（日大豊山）が14秒79で共に1着で決勝へ。決勝では、さらに向い風が強くなり（-3.2m）と、記録への期待は薄らいだが、1着高畠14秒60、2着飯島 雅人（都駒場）14秒77、4着城倉 壮志14秒91、5着渡辺 翔（保善）15秒00、6着白田 耕平（東京）15秒05と、今年も5名がインターハイ出場と2年連続の快挙であった。全国大会でも活躍が期待できる種目であることに間違いはない。

男子3000mSC

前日の予選では共に9分24秒台で宮下 紘一（駒大高）と高木 登志夫（都南多摩）が1着で通過し決勝へ期待がもたれた。決勝でも両名は常に先頭集団を引っ張り、ラストまで競り合いゴール。宮下が9分15秒76の好記録で優勝。高木が9分17秒60で2位とした。また、最後までよく粘っていた木津 晶夫（保善）も終盤伸びて9分27秒88で5位とした。この結果、男子は800m・1500m・5000m・3000mSCの中長距離全ての種目を東京都選手が優勝する強さと層の厚さを証明した。

男子三段跳

ハードルとは逆に強い追い風の中行われたこの種目。風にうまく乗れた選手が記録を伸ばし優位に試合を進めることができた。東京都勢では荘司 章浩（八王子）が終盤14m45の自己新記録で5位に順位を上げてインターハイ行きを決めた。都大会優勝の野木 靖郁（都町田）も健闘したが一步及ばず14m31で7位とした。この2年、この種目では15mに迫る選手が出ていただけに今一度奮起を期待したい。

男子円盤投

この種目は、全国的にも東京都のレベルは高い。都道府県大会で6位入賞全員が40mオーバーというのは東京都だけかもしれない。その期待に応えたのが、都大会で東京都高校新記録を投げあった佐藤 光一（都松が谷）と大山 優汰（東京）だ。両名は前半で既に45mを越え「大会新記録」を樹立していたが、最終的には佐藤が45m89で優勝、大山が45m08で2位とした。また、細川 健二（堀越）も健闘し43m47に記録を伸ばし4位として3名が全国大会出場とした。

女子1000mH

男子同様強い向い風の中行われたが、東京都大

会優勝の武山 詩歩（東京）が風をもろともせず準決勝で14秒71の自己新をマークし、好調を維持したまま決勝に進んだ。決勝で6位入賞者全員が準決勝より記録を伸ばした中、武山は記録を伸ばせず14秒79として7位となった。決勝でベストレースが出来なくてはいけないと痛感し、来年には14秒前半で走れるよう涙で誓っていた。

女子3000m

優勝タイムが9分20秒を切るハイレベルの中、東京都選手たちも東京都大会よりタイムを縮める健闘を見せたが、都大会優勝の茂木 美優（順天）が9分44秒29で10位に入るのが精一杯であった。昨年に引き続いてこの種目でインターハイへ行く選手を出すことができなかった事を真摯に受け止め、今後の強化の課題としていかななくてはならないだろう。

女子砲丸投

この種目も苦戦が予想されたが、昨年全国中学優勝で東京都中学記録を塗り替えた長沼 瞳（郁文館）が孤軍奮闘した。12mに迫る11m98の自己ベストを序盤からマークして、都勢では唯一人トップ8に入った。だが、最終6投目に逆転され7位となってしまった。かつて、日本記録保持者の故森 千夏も高校1年生ではこの大会7位とし、悔しさを忘れることなく努力することを学んだことから、今後の精進に期待したい。

女子1600mリレー

予選から東京都のチームが素晴らしいリレーを見せ、なんと4校が決勝に駒を進めた。特に白梅学園は都大会から5秒、八王子はなんと9秒近くタイムを縮めての好レースであった。常連の東京高校と「チーム一丸」の明中八王子を合わせての決勝進出であった。ここ数年、他県に占められていた決勝のレーンに東京都チームが4つもあることに感動すら覚えた。決勝でも白梅・八王子は先頭集団でレースを進めることができ、白梅2位・八王子4位でゴールした。全国大会でも決勝に進めることができる力を証明できたと感じた。東京・明中八王子の両校は序盤の遅れを取り返すことができず入賞を逃した。

男子1600mリレー

全国でも「激戦区」のこの地区のマイル決勝は「厳しい」の一言である。昨年のインターハイ優勝校で今年も全国優勝候補の桐蔭学園、千葉県優勝校の西武台千葉、全国決勝常連の相洋高校など

全国ランキング上位がひしめく中、東京高校と八王子高校が決勝進出を決めた。決勝では神奈川・千葉勢がレースを引っ張る中、両校も必死に喰らいついていた。第3走者で桐蔭学園がバトンを落とすアクシデントがあり、順位が目まぐるしく変わりアンカーへバトンが渡った。東京高校のアンカー・ケンブリッジはこの大会9本目のレースでありながら、冷静にレースを運び、ラストに抜け出して優勝した。八王子も女子同様4位でゴールに飛び込んだ。バトンを落とした桐蔭学園も6位にまで追い上げる快走を見せた。だが、7位が3分15秒台であることも脅威である・・。

まさに全国大会決勝並みのリレーをみる事ができた。

総評

男子は、短距離・長距離の健闘が光った。特に中長距離は4種目すべてに優勝し4都県全体の約半数を東京都選手が占める活躍であった。指導者の先生方の日ごろの努力の賜物であると痛感した。短距離では東京高校のリレーを中心に好結果を得ることができた。ハードルや投擲も他県と互角以上の戦いができていたと感じた。特に110mハードルでは5名が全国に出場することを2年連続で達成できたことは素晴らしい事である。投擲でも砲丸・円盤で多数のインターハイ選手を生み出し、昨年の冬季強化練習の成果を発揮できたことを確認できた。今回、跳躍種目でのインターハイ出場がやや少ないのが強化の課題と感じたが、1・2年生で有望選手が多数いるだけに期待したい。この結果、南関東地区では千葉県とほぼ並ぶインターハイ出場数と健闘が光った。

女子は、インターハイに出場できない種目が5種目もあり強化が急務である。特に3000mと砲丸投は2年続いてインターハイ出場がないだけに強化を特化したい。また、昨年度よりインターハイ出場数が減少（2つ）している事も強化委員長として真摯に受け止め施策していきたい。

しかし、七種競技・走高跳で優勝した伊藤 明子（田園調布学園）や走幅跳2位の利藤 野乃花（白梅学園）など男子同様1年生に有望選手が多数いるだけに、しっかりと育成していきたい。

南関東大会に出場された選手・先生方ご苦労様でした。北上インターハイ「がんばりましょう」